

# 文字誕生時代の人々との対話

## 筆墨心画

墨線とは内面という名の心臓よりあふれ出る黒い血液の軌跡である。古代文字、甲骨文字・金文に魅せられ五十年…。研鑽の末に辿り着いた第一人者の書。「光峰の線」の本質と来歴が本書で余すところなく語られる。



### 加藤 光峰 (かとう・こうほう)

1934年生まれ。1957年龜甲會創立。  
現在まで古代文字にまともを絞り、独自の作品を内外で展開し続けている。  
2007年 New York五番街 Forbes画廊にて画廊企画「加藤光峰個展」(Exhibition Brush in Ink)開催。  
2008年 第39回龜甲展開催(上野の森美術館)。

201801

お問い合わせは… 日外アソシエーツ 営業局 TEL.03-3763-5241(代) FAX.03-3764-0845  
〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16 <http://www.nichigai.co.jp/>

■貴店名	墨線 加藤光峰の世界 一筆墨心画集 甲骨文字・金文に魅せられて		冊
	定価(本体9,200円+税) ISBN978-4-8169-2090-5		
■お名前			
■TEL.		■FAX.	

殷・周の時代に残された中国の古代文字に魅了され追求し続けてきた、書家・加藤光峰。100点もの作品をダイナミックに掲載した図版と、古代文字と共に歩んだ半生を振り返るエッセイで構成した書画集。



### 加藤光峰 著

定価(本体9200円+税)  
A4変型・190頁 2008年2月刊行

## 墨線

# 加藤光峰の世界

一筆墨心画集 甲骨文字・金文に魅せられて

# 第I部

## 墨線 大作 臨書 小品 個展

代表作、近年の成果を踏まえた新作、数々の個展出展作など、あわせて100点で構成。さらに、漢字の成り立ち、意味、象形の解説も掲載。



大道無門 〈制作年:2005 サイズ92×180cm 出展:『墨』174号〉



甲骨曼荼羅  
〈制作年:2007 サイズ120×120cm 出展:New York Forbes 個展〉



星雲 雪華  
〈制作年:2007 サイズ各130×130cm 出展:New York Forbes 個展〉



# 第II部

## 聲 筆墨心画—私の半世紀—エッセイ 加藤光峰略歴



スヌーピー  
漫画家シュルツ氏の世界一周展示イベントに日本の筆墨作家として依頼され、二十数点制作。(140×140cm)

### 加藤光峰の「線」を求め、文字の根源から学ぶ

—感じるのは、やはり光峰の線だ。それが言いたいわけです—

私は、文字の源泉から人間の内面律を学び取りたいと願っています。そのためにも出来るだけ幅広く、そして奥深い「芸術的想像力と思索力」を身につけたい。古代文字は最もシンプルな形体で、しかも格調も兼ね備えています。また、私には人間の普遍的な美意識と訴求力(エネルギー)が強く感じられます。

それらが私の制作意欲をおおいに駆り立ててくれますし、私の生きる意味までも訓え導いてくれるような気がする昨今です。

文字だけじゃなくて、文字を通して人間そのものに私は興味を持ったんです。

### 筆墨心画—私の半世紀—エッセイ

#### 中国の古代文字

甲骨文字、あるいは金文というのは、殷という国を調べると紀元前一六〇〇年から紀元前一〇四六年と載っています。殷の王家を中心とした狭い範囲、文字が執政に機能する範囲に広がったと考えられています。特殊な、王家だとか執政者だとか、そういう人たちが執政に使ったものでしょう。最初から質問する答えも刻んでいる骨片がありますね。そうすると左側と右側と半分にして、真ん中を中心にして左右に行を進めていたりします。今日は雨が降りますか、今日は降りませんと、それで、この骨の裏にさらに穴を開けて、鉄はない時代ですから、そこに熱く焼けた青銅か焼き火箸(?)で焼くわけです。その傷、割れ目どこを走ったかで占う。それからもう一説には、この文章は後に刻ったんじゃないか

いか。代々古い師がいるわけだから、その人がこの表の傷跡を見て、ああ、これはOKだった。これは反対にNGだったというふうに記録として残したんじゃないか。現在のところは記録として残すために刻みつけたというのが主流の考え方のようです。場所は安陽というところで一八九九年にまとめて発見された。殷も二つあったんですが、最初の殷とあの殷があったらしいですが、殷後期、殷墟とありますが、安陽というのは殷墟のことです。そこで大量に発掘されたわけです。掘ってみたら骨片がいっぱい出てきた。それで一筆に有名になつたんです。ところが中国は広くて、そこだけじゃなくてしばらくして現在の西安、もつと西のほうにも出てきた。私もロゼッタストーンも見たし、いろいろ見ましたが、やはり自分が東洋人のせいかな

